

井上円了研究序説

— 妖怪博士の奇想 —

連載第四回

井上円了の観光立国論(二)

中島敬介

— 明治21年の国際リゾート開発構想 —

前回の概要

1. 円了の夙心——宗教から観光へ

政教社の「名付け親」とされる円了は、明治21年4月の同誌創刊号以来「日本宗教論」を連載していた。この評論で円了がテーマとしたのは、仏教の改良だった。

円了にとって仏教とは「日本人たる精神思想を存し日本人の日本人たる習慣遺伝を保たしむる」もので、「仏教を護持拡張するは即ち日本人をして日本人たらしめ日本人をして独立対抗せしめる要法」でもあった。「日本宗教論」で円了は「日本人」を連呼し、明治20年前後の国情を憂い、日本全体の性急で手放しの「西洋化」を嘆いた。すべてを西洋化するのなら「其人已に日本人にあらず其国已に日本国にあらずるへし」と。「日本宗教論」の本旨は、宗教(仏教とキリスト教徒の対比)を通して、「日本人の日本人たる所以」を論じる、円了渾身の日本(人)論であった。

西洋諸国ではホテルが旅客の便宜を重視し、その「安逸快楽」に細心の注意を払い、旅客の関心を惹くガイドブックが作られている。日本で「一大会社」を興し、この「秘法を」実行するならば、欧米並みのホテル展開ができるだろう。

もちろん多少の困難はあろうが、他の富国策すなわち「我人民に西洋同様の産業を与へて俄かに西洋同様の」産業立国を目指すことなどに比べれば、はるかに「平易」に実行できる。しかも、それによって得られる利益は毎年数千方を下らない。これこそ、この秘法を実行することが「今日今時の急務」とする理由である。

しかも、この方法によって利益を得れば、兵備の拡張や機器の購入、工場の設立に投資できる。まさしく「坐ながら国を富ます秘法」ではないか。

3. 「坐ながら富国論」に立ちはだかる壁

円了によれば良いこと尽くめの「秘法」だが、明治20年代の条約改正問題で紛糾する社会情勢にあって、他に優位する「国策」として機能したであろうか。

4. 「坐ながら富国論」の実現可能性

「坐ながら富国論」が国策として成立するには、外国人の自由な旅行を許容し、歓迎する世論の形成が必須である。しかし条約改正に関する限り、執筆・掲載時点(明治21年前後)さらには数年後の目標年(明治26年ごろ)でも、その気運が芽ばえるところか「嫌外・排外」を叫ぶ国(権)論が燃え盛っていた。国策としての実現可能性は、ほぼ皆無

同年6月、円了は1年余にわたる欧米各国「政教」視察を決行し、その旅先から「坐ながら国を富ますの秘法」(以下、「坐ながら富国論」と題する草稿を送りつけてきた。そこには日本が「富国」を目指すなら、強兵・殖産興業・貿易・植民の政策を放棄し、安価で平易な「国際観光」を国策として採用すべしと主張されていた。明治21年末、この新たな——奇妙な——論考が、創刊号以来の「日本宗教論」に代わって『日本人』に掲載された。「日本宗教論」で声高に異教の浸入阻止を叫んだ舌は裏返り、「外客の来遊」こそ富国の基と断言された。日本人にとって独立不羈の精神とされた仏教は、外国人への便宜供与に追い出されてしまったのである。

2. 「坐ながら富国論」の骨子

坐ながらの秘法とは、「国内にゴージャスなホテルを建て、外国人観光客を日本に呼び込む」。たった、これだけである。

であった。

そのような「坐ながら富国論」を、円了は「世間未だ其の説を主唱するものあるを見ず」と自慢したのだが、主唱どころか口すること自体が危険な状況であったのだ。

では、この時期「外国人の来遊促進」に意義を見いだしていた者は、円了の他には誰もいなかったのだろうか。

* * *

5. 「坐ながら富国論」の独創性

(1) 先行する益田孝

〈欧米商工業の大勢〉——明治20年11月

「坐ながら富国論」の前年、明治20年11月25日の東京商法会議所(現在の東京商工会議所の前身。以下、「東商」)例会で「欧米商工業の大勢」と題する講演が行われていた。演者は三井物産社長・益田孝、財界の人物で東商の副会長の職にあった。講演内容は、そっくりそのまま、円了が「想出せし新案」と胸を張った「坐ながら国を富ますの秘法」であった。

巴里「の」今日の繁昌を致したるは貿易にもあらず製造にもあらず只世界各国より来賓を茲に誘引し来たり之をして不知不識其財貨を投ぜしめたるに因る

益田は居並ぶ東商の「会長貴賓会員諸君」に、仏国人は外国の「旅客を満足せしむるの方法あれば之を施設するに決して財を惜ま」ず、今や「毎年夏季に至れば米国人の茲に来遊する者、みにても一万人に下ら」と述べ、次のように続けた。

「顧みて我国」は「風物的美丽なる氣候の穏和なる世界多く其比を見」ず、「近來漸く欧米人の來遊」が増え、さらに「其数を増すべきは必然」だが、外国人旅行者が「先づ第一に不便を感じるは相当のホテルなき」ことである。また「日本人は概して交際を重んぜず随て外国の來賓を待遇するの道に於て最も冷淡」だ。「我が東京は勿論栃木京都の如き外国來賓の歴観すべき要地には先づ完全なるホテルを設立」し、外国人旅行者の便宜を図る諸施設を整備し「彼輩に愉快を与ふる」ならば、「到る處不知不識其財貨」が投じられ、「其土地を繁昌せしむるのみならず又之が為め冥々の中に我か貿易を拡張するの效果」が期待できる。

益田は、明治20年3月から11月までの8か月間、欧米各国「商業事情」を視察し、この日の演説は見聞内容の報告だった。その中で益田は外国人來遊促進の意義（効果）を説き、是非とも「会員諸君の賛成を得他日折もあらば一問題として之を討議」したいと結んだ。

その言葉どおり、益田は年明け早々、東商に当該議案を上程した。

〈「外国人接待協会設立」の提案——明治21年5月——〉

明治21年5月21日の東商第16定例会（第29臨時会）で、益田提案による「外国人接待協会設立の件」が討議された。会長・渋沢栄一は、本案は本年1月に提起される所、「時間の都合によりて不得已む今日迄延引」したもので、本日は議案外だが「都合により只今直々に之を

を示している。文言レベルについても、本稿の僅かな引用だけで、その共通性が窺えよう。

この両者の相似は、偶々共時的に起こったとするよりも、一方が他方を模倣したか、両者が同一のテキスト（お手本）を擬えたと考える方が自然である。

前者であれば、時間の前後から円了が益田の演説・提案を借用したと考えるしかなく、後者なら明治20年11月以前に、外客來遊を国策とすべしとの意見を提出していた「別の人物」がいたことになる。どちらにせよ「坐ながら富国論」は、円了のオリジナルな発想ではなかったことになる。ここで思い起こしたいのは、「坐ながら富国論」に伝聞的な記述が散見されることである。同様の内容が記されている『政教日記』によれば、「秘法」は「友人」の説明が契機であったと明かされている。また帝国議會（第五議會）の陸奥宗光外相の演説でも、明治25年における外国人内地旅行の経済効果を教えたのは「其筋に巧者なる人」と説明されている。

条約改正への反対論がたけなわの明治20年代前半、すでに「国際観光」に熱心な人物が——間違いなく——存在していたのである。

〈「南貞助と云ふ人」——自述と記録のギャップ〉

益田提案による「外国人接待協会」は、明治26年3月の「喜賓会」設立によって実現する。幹事長として実質的に同会を差配したのが渋沢栄一である。その渋沢の伝記に、興味深い記述が見られる。

外客誘致策と云ふ程でもないが明治二十年の頃、多少それに類した事を企てた「…」。其頃農商務省の商工局長をして居た南貞助と云ふ

相談し度」と説明した。

益田は「今般府下の有志者を團結し、東京へ入府する旅客特に外客に諸般の便利を与へ、以て都下を繁昌せしむる為、更に一協会を組成せん事」を提案し、具体的な「便利を与へ、愉快を感じしむるの手段」として「案内書を編纂し、「…」之を外客に附与すること、また「賓客の便利を達すべき道あれば、何等に限らず可成此協会にて之を斡旋する」ことを挙げた。

会員は「商工会の会員」に加え、東京在住の「商工業者にして苟も府下の盛衰に直接利害を有する者」とし、「官民中名望ある人」は名誉会員として「間接の贊助を乞ふ」とした。事業経費は会員の負担とするが、当面は「筆墨紙代・案内書の印刷代（案内書は相当の価を以て売捌かしむべし）等」に過ぎず、「会員の負担は極めて小額」の「安価」な事業とされた。

益田は「小生の希望する所は一日も早く斯の如き仕事を実行するの一点」にあり、「諸君の此挙を賛成せられん事、余の深く希望する所なり」と提案を結んだ。

益田の提案は——独立の組織とするか否かの一点を除き——全会一致で賛成・採択された。

（2）真の「創唱者」は誰か。

〈円了と益田の共通性〉

益田の演説及び提案と円了の「坐ながら富国論」とは、問題意識・参考事例・事業展開・主体者等のいずれについても、極めて高い類似性

人が、日本は風景はよし、新しい国として、外国から眼を着けられて居るしするから、接待法をよくしきへすれば、必ず欧米人を誘致することが出来ると云ふ事を、頻りに外務関係の人へ申出た。

「…」喜賓会は、その時組織され「…」南氏が担当者で、「…」何でも仏蘭西や瑞西にそんな設備があつたので、日本がこれを真似たのである。当時井上さんが外務大臣をやつて居つて、此企に同意し、自らも主張されたので、私と益田孝氏とが申合せ、費用の方の心配は主として私等がやつた。

渋沢の回想を疑う理由はない。近代日本初の国際観光組織と言える「喜賓会」は、明治20年ごろ「南貞助と云ふ人」によって、発案されたのである。

この「南貞助と云ふ人」は、高杉晋作の従弟——後に養子縁組で義弟——で、井上馨や伊藤博文、吉田松陰、久坂玄瑞とも関係があつた。

南の経歴に関しては、明治14年7月付け伊藤博文宛ての自書「略歴」と『宏徳院御略歴』（以下、「自述」）がある。後者は、明治29年の本人筆記を、大正4年（1915）に長男・春峰が書写・追補し、亡父の「御遺物を添えて弟妹に贈る為」に謄写したものだ。極めて雄弁に自らを語っているのだが、その一方で南に関するまとまった論述は——「国際結婚」に着目するもの以外——見出せない。官報・改正官員録その他公文書等に、断片的な情報が残されているだけだ。たいへん興味深い人物で、稿を改めて論じたい。ここでは渋沢懐古談の時期に関係するところだけを摘出する。

明治18年7月、南は東京府の小笠原島出張所詰から、前任空席の香港領事に就く。外務大臣は井上馨だった。井上が外相を追われ大隈重信が就くと、21年11月、南は新設の農商務省・商務局次長に就く。ときの

農商務大臣は、井上馨だった。翌22年5月、南は「御用有之欧米各国へ被差遣」を拜命する。1年に及ぶ調査を終えて帰国すると、大臣は井上から陸奥宗光に交代しており、局次長職は廃止されていた。

先の渋沢の回顧には年代にいくらか混乱が見られ、南の「農商務省の商工局〔次〕長」時代は明治21年末から24年ごろ、「当時井上さんが外務大臣をやつて居つ」た時期は、明治20年9月までである。「欧米人を誘致すること」を吹聴していたのが、井上の外相辞任——のそう遠くない——以前とすれば、南が外務省・香港総領事を務めていた時期にあたり、渋沢の「頻りに外務関係の人へ申出」ていたとの述懐には符合する。

整理すれば、南貞助発案の「欧米人〔の〕誘致」に、明治20年9月までに井上馨が「此企に同意し、自らも主張」し、その井上の意思が——明治21年の「坐ながら富国論」と相似どころか相同性を有する——明治20、21年の益田の演説・提案の契機となつて、明治26年の喜賓会創設につながつていった。外務大臣・井上馨は、自らの「条約改正」最後の仕上げの時期に「外客誘致促進」を実行しようとしていたのである。益田の欧米視察には三井の当主・高保も同行したが、これは「井上馨あたりからの指示」と推測されている。井上の「子飼」でもあった益田の渡欧にも外相・井上馨の意向が働いていた可能性が高い。東商で益田・渋沢が「外国人接待協会設立の件」を急いだ背景にも、井上がらみの「事情」が潜んでいたのかもしれない。

今のところ「坐ながら富国論」に、南貞助・益田孝・渋沢栄一あるいは井上馨の関与を示す論拠は見いだせていない。ただ渋沢の伝記に、もう一つ興味深い記述がある。

其頃我が国来遊する外客は、毎年七、八千人位で、〔…〕平均一人一千三百円位を費消するから、少なくとも一千万円は我が国の現金

【主要引用参考文献】

1. 井上円了「坐ながらにして国を富ますの秘法」『日本人』第16、17、20号（明治21年）政教社／出所 東洋大学井上円了研究会第三部会編『井上円了研究（資料集 第1冊）』（昭和56年 東洋大学）
2. 益田孝「欧米商工業の大勢」（刊年不明）、国立国会図書館蔵
3. （公財）渋沢栄一記念財団『渋沢栄一伝記資料 第25巻』（デジタル版）
4. （財）三井文庫『三井事業史 本篇 第二巻』（1980）三井文庫
5. 南春峰（1915）『宏徳院御略歴』、東京大学蔵
6. 外務省調査部第一課（作成年不明）『明治元年外国官関係略歴録』、国立国会図書館蔵

勘定が殖える、之を座貿易の収入と称していた〔…〕。

「其頃」とは喜賓会設立の明治26年前後、当時「座貿易」という語が渋沢の周辺で使われていたという。明治21年の「坐ながら富国論」執筆時、既にありふれた謂いなら円了も言及していただろう。この「座貿易」は円了の「坐ながら富国論」がオリジンかもしれない。

次号への助走

外国人の内地（国内）旅行に関わつて、明らかに円了は「極端」な欧化政策を採つていた井上馨らと「近い考え」を持つていた。内地旅行だけを単独で切り出すことはできないから、「坐ながら富国論」とは条約改正に「賛成」する立場の表明に他ならない。しかし、政教社は——「坐ながら富国論」が掲載された、まさにその——『日本人』を通して条約改正反対の論陣を張つていた。しかも「宗教論」執筆時点で円了は「余が日本宗教論は全く国家の独立、即ち本誌編輯人志賀君の所謂『国粹保存旨義』にきたる者」と言明していた。円了の国粹主義的思想は、明治21年の外遊途上で「変質」したのか。あるいは、円了の思想は本人申告とは裏腹に、当初から志賀重昂ら政教社の国粹主義とは違つていたのだろうか。

（以下、次号）



なかじま けいすけ
奈良県立大学ユーラシア研究センター特任准教授／副センター長。主な著作として、『勅語玄義』に見る奇妙なナショナリズム 東洋大学 井上円了研究センター編『論集 井上円了』(2019) 教育評論社、「地域経営の視点から見た『平城遷都一三〇〇年祭』」『都市問題研究』第60巻11号(2008)、「もう一つの観光資源論」『日本観光研究会研究発表論文集 No.29』(2014)、「井上円了の国家構想」『東洋大学井上円了研究センター年報 vol.26』(2018)、「南貞助論—日本の近代観光政策を発明した男」『日本観光研究会研究発表論文集 No.34』(2019)など。